

デ・レーケと富山

明治25年3月5日から4月9日まで、デ・レーケは3度目となる富山滞在をし、高田と一緒に知事に面会したり、現場にでかけて工事を指揮・監督した。

続いて、同年5月6日から6月21日まで、デ・レーケは再び富山を訪問。到着の4日前、改修工事で施工中の利田前堤防が延長120間(約218m)にわたり決壊。また、5月11日には、再度の出水で工事中の蛇籠じゅうろうが流されたり、合口用水路のトンネルが浸水し、工事が一時中断するなど、工事現場が混乱した。デ・レーケは、高田と現場に向き、また知事に被害

の状況を説明し、今後の工事予定を説明した。

この時期、用水組合長・岩田郡長が、合口用水の件でしばしばデ・レーケや高田に面会し、用水関係者を説得するために奔走していた。5月30日、デ・レーケは自ら

利水関係代表者との会合に出席し、用水の合口化の必要性を説明した。デ・レーケ一行は、6月21日に

静養のため軽井沢へ向け出発。6月29日に再び富山に戻った。工事中の各所で細かな指示を出したり、前年9月の暴風雨で崩壊した水橋・滑川間の海岸堤防の視察にも出かけている。8月9日、高田は森山知事から「9月に災害復旧工事を審議するための臨時県議会を開会するので、その間はデ・レーケを帰京させるように」と指示され、デ・レーケ一行は翌8月10日、魚津経由で軽井沢に向けて出

発した。

ここで、明治24年12月から始まった常願寺川の改修工事についてまとめておこう。白井芳樹氏によると、次の3つの点で画期的なものだったという。

①堤防を切れにくくするため、それまで弱点だった用水ごとの取り入れ口を一つにまとめた。常願寺川左岸の12の用水取り入れ口が閉鎖され、上流の旧大山町上滝に合同の取水口が設けられた。②流れをスムーズにするため、河身かわみ(※)を付け替えた。富山市町袋から河口まで蛇行していた区間の西側に新しい河身を造り、合流していた白岩川と分離。③大日橋から下流では氾濫した洪水の跡に沿って新たな河身をつくり、河口部の直線化と相まって、土砂が河川に堆積することなく海まで運ばれるようにした。④